

価値形態論の上着は30万円

望月 清司

序 「1着の上着」ってどんな上着？

いつときの世界的金融危機そのかた、また何度目かのホコリを払って『資本論』を開くのだが、その都度、価値形態論のところで雑念が雲のように湧きあがり、論理を追うのをストップしたままジャンプしてきたな、と反省する。今も変わらない。ここらで長年のコンプレックスを払拭するために、解らないのはマルクスのせいにすることにした。

突然だが、日本のマル経原論の世界では女性研究者の影がうすいな、と思う。そんなことに気をとられるのは、価値形態論の入口でまずウロウロして、その先への一步を踏み出せない時いつも、その遠因は彼女たちが学生の時に出会う単純な価値形態式（以下第一形態）の右辺にあるのじゃないかと思ったりするからだ。

四月。ある大学の経済学（マル経）入門の教室。男性の教師が「単純な価値形態」式を黒板にすらすらと書く。パワーポイントでもいい。

$$20 \text{ エルレのリンネル} = 1 \text{ 着の上着}$$

(相対的価値形態) (等価形態)

この教師は、なぜリンネルなのか、なぜヤール（英語）でなくエルレ（ドイツ語）なのか、などとは考えたこともない。今まで読んできた『資本論』研究の本では、これ以外の例は見ることがないからだ。

「1着の上着」？ der Rock は男性名詞だが婦人服にも使う。あまり軽くはないもの。

男性の私には、上着といったらジャケットだ。スーツの上着だけバラ売りする店はない。

問題は婦人服で、上着単品だけでも、毎年の流行、色彩、デザイン、年齢別、お出かけ別など、選択基準が紳士服より圧倒的の二乗ぐらい多い。ユニクロの数千円レベルからオートクチュールのウン十万円に至るまで、大型デパートの一フロアを埋め尽くすほどのアイテムがある。この商品大群を前にして「1着の上着」は空語にひとしい。

教室でノートをとっている男女学生のうち、女子学生はみんな「リンネル」を知っている。この名ずばりのファッション雑誌もあるし、「リンネル」だけでネット検索すると、わーっと流行の女子既製服が並ぶ。だからたぶん、女子学生のほとんどは、まず間違いなく「えーっ、上着ってどんな上着よ」と反応する。ファッションに関する彼女らの研ぎすまされた感性は、「1

着の上着」と言えばわかるだろう式の、マルクスという男のセンスの無さに対して、瞬時に拒絶反応を示すはずだ。呆れているうちに、講義はおかまいなしに進んで、次の「拡大された価値形態」に入ってしまったから、「もう馬鹿みたい」となって、形態（ケータイ）ならぬスマホで友人とメール三昧となる。マルクスとはこれでバイバイ、レポートはコピペ。

男子学生はそういう想像力に欠けているから無反応だけで、この式の意味がわからないのは同じだ。しかし、その彼らもまた、

20 エルレのリンネル = 1 個の腕時計 *某入門書の一例

というような等式を見せられたら、女子学生の上着反応とまったく同じ反応を示すだろう。「何だよ、ノンブランドかタグホイヤーか、はっきりしてくれよな」とぶつくさ言いつつ、マルクスとはこれでバイバイ→スマホ→コピペと同じコースを辿る。

一、街角に立つリンネル怪人（第一形態）

黒板を背にした教員が、マル経の何派かによってこの後の講義の内容がちがってくる。『資本論体系』全11巻（有斐閣）に結集した（ここだけの仮称）「体系派」、「宇野派」（この中で鈴木鴻一郎氏分派は「商品形態」という）、「派」というほど結束はしていないので平田清明氏、『資本論』を物象化の視点から「改釈」する廣松渉氏とそのグループ、という二派二流のうちのどれか、だ。ネット検索には飽き果てた。やはり原点からだ。

どう違うかは、問題ごとにさまざまだが、まず、登場人物の素性から見よう。

価値形態論のはじめ、「単純な価値形態」（以後、第一形態とする）では、マルクスは「商品語で語る」と称してリンネルと上着以外の人間は出さない。リンネルのドイツ語 *die Leinwand* は女性名詞で、上着 *der Rock* は男性名詞。代名詞を使えば「彼女と彼」になる。それをうまく使って、マルクスはまるで女と男が恋の戯れを演じているようなきわどい「人間」模様を描くが、所有者・生産者とは書かない。体系派は、当然それに従う。宇野派の頭領、宇野弘蔵氏がためらいなく「リンネルの所有者とその欲望」を前面に押し出してから、それが宇野派主流となったが、宇野派内部の、いわゆる「世界資本主義派」の鈴木鴻一郎氏らは、体系派同様に、所有者には触れない。

平田清明氏は、一貫して、「商品所持者」という人格しか登場させない。これは第二形態以後に出てくる *Warenbesitzer* の訳語で、「商品所有者」とも訳されるが、*Besitzer* とは、所有権者というより実質的にそれを「いま、手に持っている人」だから、氏は彼が労働者か生産者かは重要な問題ではない、と判断していることになる。

これらと一線を画すように、廣松氏はキツパリ「労働・生産・所有者」と言いきる。自分の労働で生産し、所有権を主張する、つまり資本家ではなく独立生産者。そこをうじうじとボカす他三者にくらべ好感は持てるが。実は問題山積だ。リンネルの労働者と、上着の労働者は位置を交換してもいい（「両者の視座から見た事態は…共軌的である」）、というのも廣松氏のきわだった特徴である（『資本論の哲学』）。

はじめに「わからないのはマルクスのせいにするにことにした」と書いた。

マルクスに誤りは無いという認識に立ち、しかし語を取捨選択しつつ、それぞれに解釈をほどこす点で体系派・平田氏・廣松氏の立論は共通する。唯一、「おかしいじゃないか」という疑いをもつのが宇野派で、その点では敬意を表するにやぶさかでないが、「商品論の段階で価値実体を論ずべきでない」とするから、価値形態の「価値」にも「市場で売れるもの」という以上の定義は何一つ与えられないわけで、そこがもどかしい。

私の疑念は二つある。一つは、マルクスは、リンネルを生産する織物業と上着を生産する裁縫業は、互いに「私事」として営まれる独立の「私的生産者」だと言うが、ここでもう首をひねらざるを得ない。リンネルの繊維原料「亜麻」を栽培する自分の畑を持ち、刈り取って糸に紡ぎ、自作・木製の機織り機でリンネル布に仕上げる。それなら立派な「私的生産者」だ。無理だがあり得る。だが「テラー・広松」氏も、自前の牧場の羊を刈り上げ、洗浄して糸に紡ぎ、織機でウール地の布を織ってあと、「さて」とひと汗ぬぐって縫製仕事にかかるのか。まさか。

彼は、布地・糸・ボタンなどを各専門業者から（マルクスの目を盗んで）貨幣で支払ってから上着を仕立てた。マルクスに呼ばれたから、事前の取引には口を拭いて第一形態の場に出てきたのである。リンネル女は、まるで異業種のそんな原価を知るよしもないまま、自分のと「たぶん同価値だろう」と判断して上着と対面するのだ。

宇野派はここで足を絡めとられないよう用心して、単に「所有者」としか言わない。マルクスも少し後に、映画「ペーパー・ムーン」に出てくるような「バイブル販売業者(-agent)」を登場させている。彼もまた、どこかで印刷・製本された商品「バイブル」を現金または売り上げ後精算の契約で仕入れ、価値形態舞台上に「その他大勢」で登場する。

疑念の二つ目は、「20 エルレのリンネル=1 着の上着」式へのマルクスの説明が一義的でないことだ。

(1)、両者には等しい価値実体が含まれており、だから等式の意味は「直接的な交換可能性の形態である」と、身も蓋もない物々交換マーケットを描くかと思うと、(2)、リンネル側の一方的な意思表示にすぎない、とも言う。もともとこのあたり、ドイツ語版とフランス語版ではニュアンスの差がある。

ドイツ語版は、「ボタンをしっかりとかけて、上着は一見素っ気ない態度を見せているけれど、リンネル女は、そんな上へにはだまされず、彼の中に、仲間同士だから解る (stammverwandte) 結構な価値魂を見抜いたのである」(MEW, Bd. I, S. 66: 私の戯訳)」と書いたが、これがフランス語版では改められた。ドイツ語の「仲間同士(同族同士とも訳される)」だと、女と男が「der Stamm 同族、仲間」なので、名詞の男女がぼけて面白くない。

そこでまた私の戯訳:「しっかりボタンをかけた上着男のうわべにもだまされず、リンネル女は彼のなかに、価値 (la valeur: 女性名詞) という、溢れんばかりの女きょうだい心 (un âme soeur pleine) を見抜いたので。これが、[女と男という上べからは]「情事 la affair」と見える「こと la affair」の(実は)プラトニックな側面なのである」(Le Capital::Far Eastern Publishers 版、p.20)。

フランス語版だと、上着(男性名詞)は、価値(女性名詞)という女ごころを秘めた(決して蔑称としてではない)トランスジェンダー人なのであった。これまでの独文諸邦訳を、平田氏は「枯れはてた邦訳文章」(『経済学と歴史認識』334)と酷評したが、ドイツ語では「価値 der Wert」は男性名詞なのだから、フランス語の妖しい香りが漂ってこないのは当然で、訳者たちを責めては気の毒である。

平田氏のフランス語版訳は文学的ではあるものの、問題なしとしない。「靡こうとはしない上衣の気持ちをもかまわずに、亜麻布は、価値のあだし心を上衣の中におぼえる。これがこのプラトニックな現局面なのだ」(同上 333)。plein(e)「一杯の、溢れる」が抜けている。女が、男の深淵部の女心を愛するというニュアンスを汲み取っていないから、上着男は、靡こうとはしない顔の下に「触れなば落ちん」という下心を秘める、ごく普通のズル男にさされていて、「プラトニック」どころでない。おまけに「こと affair」に漂う「情事」の香りを汲み取らずに「現局面」などと凡俗語に訳したから「なんでプラトニックなの?」という疑問を呼び起こす。悩んだ人は少なくなかったろう。

少々、横道にそれた。で、結論はどうかと言うと、ドイツ語版では、上着は内心の欲望を見抜かれたから、結局、照れながら物々交換に応じることになるだろうし、フランス語版では、女と女心の男とのやりとりだから、実際には交換は行われぬ。

体系派、平田氏、廣松氏は前を採り、宇野派は後に組みする。ただし、宇野派はリンネル所有者の上着への「欲望」を説く以上、もし上着が交換OKと言ったら交換せざるを得なくなるはずだから、場合によっては一方的意志表示のタガが外れてしまう。真実は、リンネル所有者には実際に交換するつもりはなく、単に鏡に自分を映してうっとりしているだけの関係だろう。あとから書かれたフランス語版がそれをはっきり示している。

マルクスは、後には「リンネルを織る人」(der Leinweber)、上着の布地を「裁断(し縫製)する人」(der Schneider)と書く。訳者により、前者は織布業者とか織職、織師、後者は裁縫業

者、裁縫師または仕立師、といろいろだが、「業者」と「師」とではずいぶん感触が違う。「業者」だと、労働者を雇っている資本家も入るが、「師」なら独立の手工業職人の感じが強い。マルクスがそのところを明示せず、男性名詞でウェーバー氏とシュナイダー氏としか書かないから、マル経学者は舌なめずりして、この商品は「資本主義商品」か「歴史的単純商品」か、という論文書きにせつせと励んだのである。

ここはまだ第一形態でもあり、リンネルの所有者の正体ははっきりしない。マルクスは、あるときは男と書き、あるときは女に擬する。だから両性具有かも知れない「怪人」というしかない。とにかく、手許にあるリンネル 20 ヤールの価値（日常語としての、だ）に自信がもてないので、それを知りたい人物なのだ。自立した私的「労働・生産者」なのだから、費用を積み上げておよその原価の目安はつけているが、それが果たして社会的に認知される価値なのか不安なのである。

その怪人は、とある街角に立つ。論理上、市場というものはまだない。彼または彼女は手持ちのリンネルに「1 着の上着」という価値札をぶらさげる。「値札」ではない。

物見だかいロンドン子が好奇の目で集まってくる。中に、街の紳士服テーラーの姿も見えるが、リンネルが欲しくてではない。婦人服は縫い裁ちしたことがないからだ。野次馬の一人が、「1 着の上着って、どんな上着だよ」と聞いても、怪人は彼が手ぶらだと見れば眉も動かさない。もう一人の野次馬が自分の着ている上着をひらひらさせて、「これでどうだ」と言っても、怪人はチラと目を流してそれがウール地でない安物と見抜くと知らん顔だ。拍子抜けした群衆は一人また一人と散りはじめ、やがて怪人のほか誰も居なくなる。

相手がいなくなったのだから話は展開しようもない。実はこのリンネル怪人のほうも、集まった見物人など目に入らず、ただもう夢見ごこちで幻の上着に恋い焦がれていただけなのだ。何だか戦前フランスのモノクロ映画みたいに。

このところ、リンネル所有者の一方的な意思表示というシチュエーションを重んじて、ことに宇野派では、そのためには交換の成立をあらわすようなイコール等号「=」でなく矢印「→」でなくちゃという人、いや矢印でも白中抜き矢印のほうがいいと言う人、「いや、それでも双方が価値みたいだからよくない」という人たちがいて、にぎやかなことだ。もっとも日高氏や岩田氏は、「上着がリンネルを好いてくれないかもしれない」などと心配し、上着が色よい態度を示したら交換も成立しそうな気配をほのめかしたりして微妙な動揺も見せる。実際『資本論・初版』では「商談」が成立していたし。

廣松氏のグループには物々交換で何が悪いとばかり、「リンネル生産者Aと上着生産者Bとが互いの所有物の譲渡に同意している事態を示す」という人もいれば、勢いというか、江戸時代

の酒造りの酒一斗と、百姓の米一俵との交換を例として第一形態を論ずる人もいる。何をかいわんや。酒の原料も含めて米は石高封建制の「金」に等しい。こんな交換を見逃していたら代官は切腹ものだろう。無邪気も時には愛嬌だが、ここまでくると、主君におもねって暴走する家来としか見えない。

もとの街角に戻ろう。どのみち怪人は立ちっぱなしだ。マルクスに、そこで立ってると言われたから立ってたままで、日が暮れたら家へ帰り、ひと風呂浴びて寝る。

それでおしまいか、と言われても、これ以上のことは起きない。

*

ここでひとつ思考実験の被験者になっていただきたい。次の式は成り立つか？

5 個の（椅子または寝台用の）クッション = 1 軒の家

マルクスが引用しているアリストテレスの価値式（『ニコマコス倫理学』）だ。マルクスは両辺の価値が違いすぎるからでなく、どちらも奴隷労働の産物だから成り立たない、と言った。では、どちらも平等な人間（たち）が作った商品の例。次の式は成り立つか？

20 エルレのリンネル = 1 冠の宝石ティアラ

あるいは = 10 個入りワン・パックのたこ焼き

（註：「たち」は上着にもあてはまること前述）

そんなアホな！ マルクスをなぞっているだけの体系派はこう言うだろうが、なぜなら、「マルクスのとは違う例だから」、だ。宇野派は黙殺する。価値実体はここでは論じないという建前だから、左辺と右辺で価値が違いすぎる、とは口が裂けても言えないのだ。

さて、あなたは？ やはり「そんなアホな！」か。そこでもう一度。次の式は？

20 エルレのリンネル = 1 着の上着

あなたはホッとして「これなら成り立つ」と思う。なに一つ根拠はない。何度も見慣れている式だからにすぎない。要するに、思考が麻痺させられているのである。

「20 エルレのリンネル=1 冠の宝石ティアラ」は成り立たない。その理由は一つしかない。リンネル所有者は、じつは自分の価値（労働の量と質）をはじめから知っているからだ。愛妻のためにティアラは欲しいけれど高のぞみだと自覚しているし、たこ焼きは食べたいけれど 20 エルレまるまるは渡したくない。

だからマルクスの言い分は、あからさまに言えば論点先取だ。上の等式は、要約すると、20 エルレのリンネル、1 着の上着「この双方に同等量の労働あるいは労働時間が含まれていることを前提する」（国民文庫 103 ページ）、つまり、リンネルと上着は最初から同価値だから＝または→記号で結ばれる、とも言うのだから。「自分の価値を相手の使用価値で表現」するために、「自分の価値と等しい価値の相手を等価形態に選んでいる」にすぎない。ならばリンネルは、

いったいどうやって自分の「価値鏡」である多様な上着類の中から特定の、自分と同価値の(と、信ずる)上着を選び出せるのか。俗の世界では、こういう風景を軽侮の意味をこめて「出来レース」、または嘲笑の意味をこめて「茶番」という。

そればかりではない。実は前もってひとつ厄介なことがある。「20 エルレ」という数と単位がまた手に負えない代物だったのだ。

「エルレ」(ドイツ語の女性名詞 *die Elle*) は英語のヤード *yard* で、91.4センチだから、20 ヤールは 18.28 メートル。問題は幅だ。『広辞苑』に「ヤール幅」という言葉もあるくらいだから、幅は 1 ヤールなんだろうと単純に考えていたのがまちがいだ。『ウェブはバカと閑人のもの』というベストセラーがあったが、その閑人よろしく、日本語サイトをうろろうしてわかったのは、リネンの幅に業界規格なんてものはないということ。現代はそうでも、1850、60年代ではどうかと、グーグルでイギリス織布業の歴史や織物事典のあたりを漁ってみたが、本場でも迷路そのものだった。「シングル幅」が 36 インチ=1 ヤード、「ダブル幅」が 48~60 インチだとか(これでなぜダブルなんだ?)、ジョン・ケイの「飛び杼」の発明(1733年)以後は「広幅生地」(*broader fabric*) が普通になったとか(広幅ってどの位よ?)、「ヤール幅」といっても実際は 8 分の 7 とか 4 分の 3 ヤードだとか(そんな無茶な)とか、まるでとりとめがない。マルクスの時代のロンドンのヤール幅がこれだ。しめくりに近所の生地屋で買うふりをして聞いて見たら、女店員は「いろいろですね」と、涼しい顔だった。

要するに「20 エルレのリンネル」とは、長辺はあっても短辺のない四角形だ。「高さ 20 メートルのビル」というに等しい。上着の方も負けず劣らず。生地のも、縫い上がりの巧拙も、労働着か礼服かも解らない。ただ「一着の上着」では、「一匹の猫」と言うのとさして変わらないだろう。かくして「単純な価値形態」とは

幅も品質も不明な 18 メートルのリンネル=ウール地と言うだけの上着 1 着となる。単純とは、シンプルながら、そのシンプルさゆえに事の本質をずばり明示する様態も指す。だがこれでは濃霧のあなたにかろうじて 2 物体を判別できるだけだろう。

余計なことを付け加えれば、「ヤール」と違い全然と言っていいほど日本語になっていない「エルレ」を、男性論者たちがまるで抵抗なしに使って論戦しているのが可笑しい。

二、アバウトというほかない商品の列 (第二形態)

「1 着の上着」はもちろん、「20 エルレ」さえも結局はぐらかされたまま、かなしく「全体的な、あるいは拡大された価値形態」(いわゆる第二形態)へ移る。

ここでデビューする等価形態の新顔は、茶・コーヒー・小麦・金・鉄、だ。

また街角に立った20エルレのリンネル怪人は、価値札を5枚ぶらさげることになるが、重なって見にくいので1枚のプラカードに書き並べる。

20 エルレのリンネル=1 着の上着
=10 ポンドの茶
=40 ポンドのコーヒー
=1 クォーターの小麦
=2 オンスの金
=半トンの鉄

眠くなって来た目を「ええっ」と覚ましてくれるのが、ニューフェイスの中でも「金」だ。まさか晴れの舞台で18Kもなかろうから、24Kの純金と推定していいだろう。品質として絶対確実なのはこれだけなのである。「またかい」と集まってきた群衆も、ここで目を剥いたにちがいない。

ともかくもここで値段（価値の別名）の見当がつけられる。貴金属の1トロイ・オンスは約31.1グラム。その値段は、2018年6月20日のニューヨーク商品取引所（NYMEX）先物市場では1,299.3ドルだった。まだ値上がりするとし丸めて1,300ドルにすると、2オンスは約2,600ドル。さらにざっと丸めて、同日の外為市場の円価約110円で換算すれば28万6千円だ。えーい、面倒だから30万円としよう。

これは面白くなってきた。

2 オンスの金	=	30 万円
20 エルレのリンネル	=	30 万円
1 着の上着	=	30 万円
10 ポンドの茶	=	30 万円
40 ポンドのコーヒー	=	30 万円
1 クォーターの小麦	=	30 万円
半トンの鉄	=	30 万円

ながめていると、何だか化かされていたような気分になってくる。

なにしろ、あの不可解な「1着の上着」とは、ジャケットならば1着30万円という、銀座の英国屋でもとびきりのランクじゃないかと思われる代物で、普段着どころかと言うのである。ここでユニクロなんかイメージするような人に価値形態論を論ずる資格はない。教室の彼女たちは、あそこでマルクスとおさらばして正解だった。それにしても、10ポンド、20ポンドの生活費ををエンゲルスにせびっていたマルクスのどこに、そんな最高級に近い上着への想像力があっただろうか。大英図書館でのたばこ休みに、備え付けの「タイムズ」で紳士服広告なんか

眺めていて思いついたにちがいない。

30 万円の上着を前に等価形態の夢に焦がれていたリンネル女の素性も見えてきた。このリンネルは 1 ヤールで 1 万 5 千円。リンネルって、そんなに高価なものだったのか、と目を開かれる気持でまたネットを開く。閑人はここでもうんざりする。ほとんどが柄物で白生地は数えるほどだ。ようやく見つけた亜麻 100 パーセントの白布は、生地幅 135 センチで 1 メートル 990 円だった。似たような品物もあるが高くても 2000 円だ。ここは生地幅を無視して、仮に 1 メートル 1000 円とすると、1 ヤールは 914 円。これと比べたらヤール 1 万 5 千円の生地とは、もう英国王室御用達の特別最高級の、と見当がつく。あの街角に手ごろな上着の持ち手がいたとしても、これではビビる。

小麦は扱いやすい。南魚沼産こしひかりと、鹿児島産あきたこまちぐらいの差はあるかも知れないが、品質はまあ均一だろう。『資本論』時点（1865—9 年）での価格は、1 クォーター（＝約 288 リットル）当たり 53.62 シリング。20 シリングで 1 ポンドだから、つまり 2 ポンド 14 シリング、十進法では 2.7 ポンドだった（マサイアス『最初の工業国家』）。

これにマルクスは 2 オンスの金と値をつけた。扱い慣れなかったせいか、マルクスの金の評価はかなりいい加減で、「2 ポンド・スターリングが 2 オンスの金の鑄貨名ならば」とか、「2 ポンドが 2 分の 1 オンスの金」とか、いろいろ書いている。当時の金本位貨幣「ソヴリン金貨」は、鑄貨としては摩耗を防ぐために少量の混ぜ物をして純度は 91.7 度だが、これが 1 オンス＝3 ポンド 17 シリング余とは「価値尺度」節の（注 61）にも出ている。これが正確な価値だ。金 2 オンスとは 7 ポンド 14 シリング（十進法で 7.7 ポンド）である。つまり時価 2.7 ポンドでしかない小麦 1 クォーターに、その 3 倍もの 7.7 ポンドの値を付けたわけだ。

こう書けば、ごちゃごちゃと下らない計算だ、物価変動もあるだろうし、それなら 20 エルレのリンネル＝3 クォーターの小麦と書けばいいだけのことで、理論的にはどうってことはない、と反論されそうだが、そういう人も自分で価値形態論を論ずるときに、やっぱり平然と、「1 クォーターの小麦」と書くに決まっている。

「鉄」が出てきた。ここらで「単純商品派」はノックアウトかと思ったら、いやいやどうして。「鉄は古代から作られてるよ」と涼しい顔だ。古代日本の出雲でも、八岐（やまた）の大蛇（おろち）伝説が生まれるほど、砂鉄の精錬のために山の木を伐りまくったため八本の川で大洪水が毎年起きた。そんな共同体（ゲマインウェーゼン）的単純商品なのか、資本主義工場製なのか、はたまた、ありそうもない想定だが、自分で砂鉄を採り・自分で精錬し・自分で所有する「労働・生産・所有者」の鉄なのか、ここらは全く濃霧のななたである。とにかく、自分の 500 キログラムをリンネル所有者が上着 1 枚程度の品としか見てくれないことに、腹も立て

ずに列に並んでいる善人である。

そもそもこの「鉄」って何だろうか。まさか、文化大革命のときに中国の貧農が鍋・釜ほうりこんで「土法」で作られたようなスカスカの屑鉄ではあるまい。銑鉄・鑄鉄・錬鉄・鍛鉄などは英語で iron、ドイツ語で das Eisen で、鋼鉄の steel, der Stahl とは区別される。1856年、ベッセマーが「転炉」の底から空気を送り込むだけという、単純でほとんど追加費用なしの大発明をして、あれよと言う間に鋼鉄の価格が劇的に下落した、というニュースはマルクスも新聞で読んでいた筈だが、それでも「鉄 das Eisen」と表記するのだからはっきり鋼鉄ではない。ネットで漠然と「鉄・価格・歴史・英国」などと検索すると 10 万件以上もヒットする。私のパソコンでは何度も「ビジーでアウト」しながらも「鉄」の種類別価格は見つからず、ようやくたどりついたイギリスのサイトでは、1867年の鋼鉄インゴット・トン当たり価格は 8 ポンド 17 シリング余だった（A. バーチ『英国鉄鋼（Iron and Steel）経済史』）。第二形態では「半トン＝金 2 オンス＝7 ポンド 14 シリング余」だったから、ここでもマルクスは自分の「鉄」に、市販の鋼鉄の 2 倍もの値段を付けていることになる。

次は茶。イギリスだから「紅茶」にきまっている。1 重量ポンドは約 454 グラム、10 ポンドで 4,536 グラム。スタンダードである四角い紅茶缶は 125 グラム入りだから、10 ポンドの茶はだいたい 36 缶。つまりこの 1 缶は 5,555 円だ。私は紅茶中毒を自認しているが、今の日本ではまずお目にかかれぬ、とんでもない高級品である。マルクスは大英図書館に通う途中の紅茶専門店のウィンドウでちらと見たのだろう。産地は、はじめの中国福建省のあたり（最高級を示す「ペコー」は中国語「白毫」の英語読みだ）から、のちにはインドとセイロンに移る。イギリス人が、インドで中国原種とは異なる茶樹の原木を発見し、両植民地に巨大なプランテーションを展開した。ここで働くのはインド各地からかり集められた男女労働者で、最盛期には家族もろとも約 50 万人が、ふつう 30 年間（ほとんど終身！）という年期契約で働いたのだ。高地の山腹で摘んだ茶葉の大袋を麓まで運びおろす労働はどんなに辛かったことか。

その次がコーヒー。40 ポンドは 18,160 グラムだから、これも丸めると 1 グラム＝約 11 円。そこらのスーパーで売ってるコーヒー豆パックで、ブルーマウンテン・ブレンド（この「ブレンド」の率があやしい）が、200 グラムのパックで 1000 円前後で、つまり 1 グラム＝5 円。茶とちがってこちらは市販品のせいぜい 2 倍の中級品だ。当時のヨーロッパ市場を含め、19 世紀半ばから世界市場の 70% を占めたのはブラジル・コーヒーだが、1880 年までは、奴隷制プランテーションで生産されていたのである（池本幸三ほか『近代世界と奴隷制』）。そんな曰く付き品物とは露知らないが、買い物袋片手の賢いヘレーネ・デームートはこのレベルの紅茶・コー

ヒーでも手を出さない。

はっきり言えば、現代ニューヨークの先物金を基準にして、1860年代中ごろロンドンの諸商品の相対価格をこのように計算することは無茶もいいところだ。この間には無数の技術革新もある（ちなみに2013年5月某日の「日経産業新聞」の記事では鉄スクラップ（H型）1トンが2万3～4000円、つまり半トン1万2000円ぐらいだった）。そんなことは百も承知だ、と反論するなら、マルクス生存時のロンドンでの2オンスの金平価を基準に、ほかの商品の価格バランスはほぼ適切なものだったと、当時の商店のチラシか何か集めて証明してもらおうではないか。

言葉どおり、私は挑発しているのである。できるわけがない。そもそも「1着の上着」「20エルレ」の正体があやしいのだから、上記の価格バランス表は誰にも作成できない。ここから出てくる結論は、たぶんこうだろう。価値形態論を構想するにあたり、マルクスは、リンネルと上着とだけ書けばどんな馬鹿でもわかるだろうと高をくくっていたこと、第二形態でもその二つ以外の商品を選ばさいも周到に考え抜いたとはとても言えない、実にアバウトというしかない列挙だった、ということだ。護教的に弁護すればするほど、気の毒だが泥沼にはまるとはつきり請け合う。

裁判では、弁護人が被告の罪を軽くするよう、時に被告も気がつかない事情をとりあげて情状酌量の弁論を展開することは珍しくない。その伝でゆけば、マルクスが、イギリスを世界に冠たる大英帝国たらしめた綿織物でなく、地味な英国産リンネルなんか持ち出したのは、綿織物の原料である綿花が、アメリカの奴隷農場の、あるいはインドの最下級農民たちの産物だったことを念頭に入れたのかも知れない、と。だが判事は冷たく情状酌量の弁護を却下する。問題の根本はリンネルか木綿かでなくて、「20エルレ」の質と幅なのだから。

*

これを要するに、品質不明・価格ばらばらのリンネル、上着、鉄、それに輸入品の茶とコーヒーは価値形態論の場にはふさわしくない。これら5品目を追放するとして、そのあとを埋めるのにはそれなりの苦勞もあろうが、原論学者はそれで飯を食っているのだから、左辺・右辺ともにバランスを確保した商品を考えるくらいの汗はかくべきだろう。

「無理を言うな。みんなが好き勝手な商品を選んだら、研究者同士で話がかみ合わなくなっちゃうよ」と言う悲鳴は聞きたくない。教科書相互で例とする商品の名が一致しなくなつて、一冊の教科書だけで学ぶ読者には何の痛痒もない。これ位の汗もかかないでは、「価格は需要曲線と供給曲線のまじわる点で決まる」という、脳天気になりやすい学説に、学生はいつせいに流れる。ぐずぐず弁解してる場合でない。

研究者同士で異なる価値形態式が作られても、あれこれ教科書同士を比べてみる学生などいるはずもないから、ことさら論ずるに足りない。現に、宇野派のあいだで、宇野式・鈴木鴻一郎式・日高晋式・岩田弘式・永谷清式などなどが仲よく併存しているのを見ればわかる。体系派は誰か一番偉い人が、「これからはリンネル・上着・茶・コーヒー・鉄をすべて別の商品に変えることにする」、とお触れを出せば済むだろう。

一つ、急いでつけ加えておく。「1 着の上着」は「1 匹の猫」というのと変わらないと言ったが、地域をきままに闊歩している自由猫は別だ。タダの商品では困る。猫も品種によっては立派な単純商品または資本主義商品なのだ。もう昇天したが、15 年ほど一匹の牡猫と暮らしたことがある。アビシニアンという種のノーブルな猫で、アビ猫を専門に養殖するブリーダーのところからウン万円で迎え入れた。何エルレのリンネル相当かはいいだろう。彼はそれに十分に値した。十分どころかお釣りが来るくらいに愛しい猫だった。「生き物は死ぬじゃないか」と文句を言う人には、上着一着買ったなら 15 年間ボロボロになるまで着つぶすのか、と答えよう。犬のことは知らない。

三、貨幣は小麦で決まり、金はアウト（第三・第四形態）

一般的な価値形態（第三形態）は、拡大された価値形態の左辺と右辺を無造作にひっくり返して、20 エルレのリンネルを共通の等価形態とただけだ。はじめっから第三形態を予想して第二形態を立てているのだから、面白味がないという以上に、第二形態の難点もそっくり引き継いでいるので、無理の増幅というほかない。体系派の中にさえ、珍しい例には属するが、『資本論』は、ある価値形態から他の価値形態への発展あるいは移行については、多分に形式的な説明しか与えていない」（山中隆次ほか『資本論入門』有斐閣新書）という不服も見えるくらいだ。式は掲げなくてもいいだろう、と思ったが、やっぱり落ち着かないから、スペースがもっていないが、一応掲げておこう。

一着の上着	=	20 エルレのリンネル	
10 ポンドの茶	=	〃	
40 ポンドのコーヒー	=	〃	
1 クォーターの小麦	=	〃	* 本文では、「半トンの鉄」の次に
2 オンスの金	=	〃	「X 商品 A = 〃」という例示
半トンの鉄	=	〃	があるが、漠然すぎるので省略。

マルクスは「一般的な価値形態は、商品世界の共同事業としてのみ成立する。一商品は、同時に他のすべての商品が自分の価値を同一の等価で表現するがゆえに、新たに登場するどの商品種もこれを模倣せざるを得ない…」と書いている。

これを受けて、いずれ劣らぬ海千山千のつわものたる商品世界人が、一般的等価物策定委員会を開き、鳩首協議をかさねたあげくに、「ま、ここはひとつマルクス博士の顔を立てて、やっぱりリンネルさんをお願いするというので、シャンシャン」というわけか。

ひどいもんだ。いったい何考えているんだ。何も「リンネルは一般的等価にふさわしくない」と言ってるのではない。幅も品質もわからない代物が、長さだけ 20 ヤールというだけで、どうして「同一の等価」になれるか、と言うのだ。とりわけ商品の王を自認する誇り高い金の持ち主が、自分の価値がわからないからと、「なんだかわからないリンネル」で計ってもらおうなどと舞台に並ぶわけがないだろう。

と、いきり立つ私をか委員諸氏が「まあまあ」となだめにくる。「マルクス博士の顔を立てて、って言ったでしょ。落とすところは金だって分かってるんですよ。途中は何だっていいじゃないですか」、と。なるほど、わけ知りのビジネスマンはそう来るか。

そうは言っても、資本論学の徒はいちおう筋を通さねばならない。なんとかせねばと腐心した日高晋氏が「茶」を、岩田弘氏が「コーヒー」を、降旗節雄氏が「コメ」を、永谷清氏が「銀」を一般的等価形態に置いたのは、その無理を救おうとする、それなり良心的な工夫だったのだ。こんな試みは、体系派には神をも恐れざる冒涇と映るのだろう、論評すらしていない。

いうまでもなく、第三形態の一般的等価商品は、もう理論上の貨幣である。岩井克人氏ふうには「みんなが貨幣と思えばそれが貨幣」なのだから。この点、いろんなテキストの中では、左辺商品 1 単位ごとに右辺の茶の量を変える日高『経済原論』（1959 年）が一番美しい。ここはもう理論の問題というより、日々の取引上の便不便の問題なのだ。そこで、いきなり金というのもなんだから、その前段階として銀がいいんでないかい、とは誰も一度は思い浮かべたはずだが、この着想を早く永田清氏（『資本主義の基礎形態』、1970 年）が定式化していたということを知ったのはずっと後のことだ。あらためて氏の慧眼に敬意を表しておくが、問題なしとはしない。これは後で述べる。

とりあえずここまでで、上に挙げた宇野派 4 品目を比較するとすれば、もう比較にもなんにも、「銀」がぶっちぎりで優れていることは誰の目にも明らかだろう。

その点、日高茶、岩田コーヒー、降旗コメなどは、それなりの工夫の所産であることは認められるけれど、どれも品質が問題になる。降旗コメはまず落第。農薬漬けだし、無農薬なら虫がつく。日高茶と岩田コーヒーは、第二形態の枠の中でしか考えておらず、「植民地産品じゃまざい

かなあ」というためらいが毛ほども感じられない。両者とも冷凍庫に保存してさえ、変質をまぬがれない。紅茶の方がいくらかましという程度だ。どちらも銀の前に頭が上がるまい。

相撲の番付にたとえば、永田銀が前頭、日高茶が十両、岩田コーヒーが三段目、降旗小麦は序二段というところか。リンネルはふんどし担ぎだ。

ここで、イギリスには金銀鉱山はなかったはずで、金銀も輸入品じゃないかと文句をつけるのは歴史を知らない人だ。ローマ帝国の版図拡大で北西欧には、ローマがアジア・アフリカとの交易または略奪によって、または自領だった古代のスペイン・ルーマニアの金鉱山から集積した金銀（貨幣と地金）がどっと入ってきた（G・サルヴィオリ『古代資本主義』）。映画「ベン・ハー」で主人公が一時鉱山奴隷として酷使されたシーンを覚えている人もいるだろう。1066年のノルマン征服でイングランドが国の形を整え、泳いでも渡れるドーバー海峡かなたの大陸と通商を重ねるうちに、イギリスはずっしりと金銀を貯積し金属貨幣制度を整えてきた。新大陸におけるスペインの金銀山開発→ヨーロッパへの流出よりはるか前に、ヨーロッパでも南ドイツからハンガリーにかけて豊富な銀山が開発されていたのだ。モーツァルトの町ザルツブルク（オーストリア・ドイツ語の発音）も豊富な岩塩（Salz）だけでなく、銀産景気の方でもうおった。イギリスにとって金の出自はたしかに外国でも、もう自前とっていいくらい貯め込んだ金銀で、交易のインフラストラクチュアは完成していたと言える。

*

面倒になってきたから、ここらでそろそろ第三形態とはおさらばなどと気楽に考えていると、その土壇場で地雷を踏む。地雷とは、第二形態に「その他おおぜい」の一人として顔を出してきた「金」だ。2 オンスの金の持ち手は、たとえば上着の持ち手が「仕立屋」だったのと同じ資格で、採金現場での「労働者で、生産者で、所有者」であるとも言われるだろうか。このところ、宇野『（旧）原論』と鈴木『原理論』は、はじめ共に第四（貨幣）形態のところ「金一オンス」に値切って半歩譲る姿勢を見せてはいたが、よくよく考えてやっぱり危険を察知したのか、『（新）原論』、『セミナー経済学教室』（鈴木）では知らん顔で金をカット。慎重にも第一形態しか引用しない平田氏は、はじめから地雷原に足を踏み入れない。

「交換過程」章でマルクスは、当時の北米のゴールド・ラッシュを思い浮かべてか、「金の価値は原産地での産金労働時間で決まる」と述べた。マルクスのどんな言説も強引に神聖化する体系派すら、さすがにこれは「殿、ご乱心」と思ったのだろう、代表的な一人は、交換過程の叙述をほとんど逐行的に解説しながら産金労働の箇所だけ、まるでそんな叙述ははじめっから無いとばかり、知らん顔でパスしていた（富塚良三『原論』1974年、同『資本論体系2（交換過程担当）』1984年）。主人の不行跡をひた隠す忠僕さながらに。体系派の中にはこれが地雷だとは気がつかない人もいる（岡崎栄松ほか『解説資本論（1）』有斐閣）。宇野派にとってもこ

の採金労働価値説は「腫れ物」のようだ。その快刀乱麻ぶりで知られる岩田弘氏も口を拭ってパス（『マルクス経済学・上』）。ここら当り、宇野派論客が独占している『資本論を学ぶⅠ』でも同様。

まさに「殿、ご乱心」なのである。新産金は、それに投下された労働時間とはぜんぜん無関係に、地球の上にたまった金累積から決まってくる現在金価格からコミッションを引いて買い取られるほかない。チャップリンの「黄金狂時代」ほか多くの gold digger 映画が示してくれるとおり、鉱区権さえ買えば、ひと掘りで大金塊にぶつかる可能性もある。だからこそその「ゴールド・ラッシュ」なのだが、掘っても掘っても金脈にぶつからず（その間も立派な「労働時間」だ）、すり切れたGパン1枚で泣く泣く去るの方がむしろ多い。ハンフリー・ボガードの「黄金」やメアリ・スティーンバーゲンの「ゴーイング・サウス」なども、漠然とながらゆるい採掘権を手に入れていた。むろん、現場で雇われたただの労働者は論外だ。これに対し、銀は安いし、地上に露出していない上に、水銀だなんだの手間がかかるから、流れ者の銀掘りの映画はない。

岩井克人氏も言う。「金鉱掘りの汗水はまさに大海に流れこむ一筋の小川に過ぎない。かれらが日々投入する労働の量が、人類の歴史はじまって以来この世界に蓄積されつづけていた金の量全体の価値を規定するなどということは、イヌのしっぽがイヌの胴体をうごかすよりもはるかに困難なことなのである」（『貨幣論』1993年）。

至言である。要するに、価値形態論に、金は宝飾品としてさえ顔を出してはいけないのだ。

岩井氏はここから、「マルクスは金を早く出し過ぎて、労働価値説を崩壊させた」と人を驚かせたが、実は体系派は20年も前から（実際はもっとはるか昔から）百も承知でここをパスし、何事もなかったようにマルクスを取りつくろっていたのだ。岩井氏はマルクスの傷に塩をなすりこんだといってよい（「いってよい」と書いたが、私は宇野派ではない）。

ただし岩井氏の「宙ぶり構造→Z貨幣形態」論は論理の曲芸と言うしかない。喜んだ体系派に「マルクスの曲解だ」という論文（業績）を量産させたただけだ。岩井氏は、第二・第三形態自体が他の商品と同格の労働生産物として金2オンスを交えている段階ですでに、価値形態論に金を持ち出したらおしまいよ、とだけ言えばよかったのだ。そのあと行きがかりで交換過程論に触れなくてはならないとしても、「何しろ人類史の知恵だ」と言って、論理の外部から貨幣金を持ち込めば、体系派を、彼らがいやがる産金労働価値説の土俵に引きずりこめたはずだ。第三形態ですでに「商品貨幣」が成立しているのだから、あとは「貨幣商品説」でも「貨幣国定説」でもなく、「金貨幣人類史説」でいい。「宙ぶり構造」などと言い出すものだから、せつかくの地雷の爆発力が削がれた。いかにも惜しまれる。

それなら銀だって同じじゃないかと言われるだろう。まったくその通り。アダム・スミスが言うように、銀は金の一六分の一の価値しかないけれど、逆に言えば人類発祥以来の累積量は一六倍も多いわけで、産銀地での労働時間で決まるなど、とんでもない話なのだった。結局、永田氏は思わず宇野派の杵をはみ出していたことになる。

前に、価値形態論をわかりやすく、しかも誤解を生まないように説明するためには、リンネル・上着はともかく、茶・コーヒー・鉄など使うべきではないと言ったが、当然、金と銀も加えねばならない。残ったのは、小麦だけだ。小麦は品質がほぼ決まっていて、ブリテン島のどこでも作れる上、上着や鉄と違って万人が毎日消費する必需品である。誰でもが欲しい。「小麦貨幣」、これできまりだ。これで何でも買える。

ただし国内産に限る。輸入小麦では、生産の現場が見えない。言い換えれば、「抽象的な・人間的な・労働」のうち「人間的」な労働の所産かどうか知るすべがないからである。

四、抽象的なのは、人間か、労働か

というところで、問題は「抽象的人間労働」に戻る。「労働」に登場を願うから、宇野流通形態論とはここでおさらばする。

「抽象」をとりあえず「事物や表象を、ある性質・共通性・本質に着目し、それを抽（ひ）き出して把握する」（『大辞林』）ということにして、だいじなのは、「事物や表象」自体、つまり抽象という分析作用を働かせる対象は、何でもかんでもいいわけでない、ということである。死海に網を投げたって魚は捕れない。犬は脊索動物門・哺乳類綱・ネコ目・イヌ科・イヌ属という動物である。このことを知らないまま、ネコ目の「性質・共通性・本質」を抜き出そうとすると、犬が猫であるわきゃないと頭から犬を除外してしまえば、その抽象は間違った結論を引き出す。ここは一種どうどう廻りの論理になるけれど、抽象作業の対象群には、あらかじめ抽象すべき何か、目に見えなくても含まれていなくてはならないだろう。

体系派はほぼ例外なく、『経済学批判序説』の「労働一般という抽象」という言葉を解説して、それが全面的に存在するのは資本主義社会だが、しかしエンゲルスを後ろ盾に、ひろく「超歴史的概念」でもある、と言う。体系派に固有の思考では「資本主義社会以前にも」ぐらいのところだ。「超歴史的」というと、抽象されるほうの具体的「労働一般」は、約20万年前のホモ・サピエンス誕生以来ということになってしまう。

廣松氏の上着所有者が「没人称化された」抽象的・人間であるのは、リンネル所有者の目で見ると「相手の人格などどうでもよい」からである。この言葉は、同時に生産者でもありう

る上着所有者を相手ならそれなりにあてはまるように見えるけれども、茶とコーヒーが入りこんでくると、そうは簡単に言い放てない。この2商品に限っては、リンネル所有者の前に立つ「人格」は、廣松的な「労働・生産・所有者」である以上に輸入商人である公算が大だからだ。マルクスの商人とは、産業資本家または運輸資本家が運びこんできた商品を店に並べて、自分は坐ったままレジのキーを叩いて口銭を稼ぐだけの人間である。まれに彼ら自身が茶のブレンダーかコーヒー豆のロースターでもあるかもしれず、「俺は生産者だよ」とうそぶくかも知れないが、それはちょこっとした最終工程であって、自動車でいえば塗装工程に過ぎない。塗装工が「この車はおれが作ったんだ」と自慢したら、基幹工程の仲間たちにボコボコにされるだろう。

ここで、第二形態を背景として、廣松説を整理しよう。

- (1) 等価形態に立つ人間の「人格はどうでもいい」から彼は「抽象的人間」である。
- (2) 「どうでもいい人間」の労働だから、「抽象的（人間の）労働」だった。
- (3) つまり、等価形態人は、何らかの労働の担い手でなくてはならない。
- (4) すると、茶（とコーヒー）において特に、次の二律背反が発生する。
 - ①「所有者ではあるが、労働者ではない人格」は等価形態人になれない。
 - ②「労働者ではあるが、所有者ではない人間」も等価形態人になれない。

これは推測だが、そこに一抹の不安を覚えたのだろう、廣松氏は第二・第三形態を論ずるさい断りもせずコーヒーを除いた（『資本論の哲学』）が、これは「頭隠して尻隠さず」の工夫だろう。「尻」とは茶だ。これは想像だが、廣松氏は、「茶」という文字から、静岡茶・狭山茶・宇治茶なんかをイメージしてたのかも知れない。だが、インド・セイロンの「抽象的人間」は、イギリス本土の相対的価値形態人の前には姿すらあらわさない。

廣松氏が覚えずはまりこんだ陥穽を掘っていたのはほかならぬマルクスである。

価値形態論のすぐあとで、彼は言う。「人々は…彼らの異種の諸生産物を交換において価値として等置することで、彼らのさまざまな諸労働を人間的労働として等置するのである。彼らはそれを知らないが、それを行う」と。価値形態論での叙述とまぎらわしいここを「先取り」して廣松氏は、「上着の持ち手」を「上着の労働・生産・所有者」と定義したついでに、それを価値形態論全体に適用しようとしたから、第二形態で穴に落ちた。茶葉生産の実の「労働者」は地球のはるかかなた、インド・セイロンにいるのだから。茶（とコーヒー）には、さらに、これらの産物を遠くアジアから（またブラジルから）命がけで帆船（当時はまだ蒸気船より早かった）を操ってきた船長・水夫たちの運輸労働も含まれる。言うまでもなく運輸は生産の延長にほかならない。船内の鼠捕りネコもよく働いた。

原料の労働・生産者じゃない、ロンドンで商品として通用するよう最終的にリファインしたのが真の「生産者」だと（マルクスを盾にして）言い張るなら、さっきの塗装工と同じだ。

ついでに言えば、第二形態で廣松氏は「金」を平気で商品群に並べていた。せっかくコーヒーを除いたのに、出自がローマ帝国かも知れない、という想像力に欠けた。

価値形態（つまりは交換価値）の背景に前提されている労働は、そんなセコい計算の積み上げから算出されるものじゃない、市場に現れてきた商品なら「なんでも総労働の所産」なんであって、地球上に散らばったあれこれの労働の積算など不可能だ、と言うのは結構。つかめない労働は、「人間労働・の・抽象」対象から外すことだ。

では、これまで出番のなかった平田氏の言い分を聞いてみよう。

氏は言う。「人間的同等性＝平等性としての価値。このことを抜きにした価値論とはおよそ存在しえない」。「人間としての現実的な活動の不等性を捨象した同等性、つまり近代的人間の同質性にほかならない」。平田氏はここから、抽象的に人間的な労働を、同等的人間的労働とも言い換えている（『経済学と歴史認識』1971年）。横から口を出せば、平田氏は「人間的労働」というものを抽（ひ）き出してくる母集団のことを言っているのだ。ここをきちんと認識・表明しているのは、平田氏だけである。

「近代」という文字を見た瞬間、宇野派はパブロフのイヌ同然、「また例の単純商品社会説か」とあざ笑うのだが、宇野派だって、リンネルほかの商品所有者を「客を待っている商店主」に擬しているのではないか。毎日、しず心なく店を開き、無法略奪に脅えないで商売ができるのは、市民社会だからだ。平田氏をとがめる資格はない。平田説は、商品経済が優勢な「市民社会」に生きる人間＝労働者をピタリ指しているのである。

いささか不審なことも平田氏の価値形態論分析にはある。なぜだか、氏は主著で第一形態しか例証に挙げない。長大な論述の中で掲げられるのは、例の「20 エルレのリンネル＝1 着の上着」式だけなのである（上掲書第4章）。第二・第三形態には踏み込まないから、「茶」と「コーヒー」には触れなくて済む。なぜか。あくまで推測の域を出ないが、平田氏は、かの時点では、茶とコーヒーに話が広がれば、おのずとそれらの原産地における労働に言及せざるを得なくなり、「近代的人間に同質の労働」という基本前提をおびやかす、と、正しく直感していたからだろう。

ある種のもどかしさを覚えさせられるはするが、同質人の労働という一点に限れば平田氏は文句なしに正しい。彼らの労働は、ある社会（ゲマインヴェーゼン）の内部で相互にインターチェンジャブルでなくてはならない、と言うのだから。労働なら、どんな環境でどんな待遇を受けている労働であってもかまわない、わけではないのだ。かくして、労働・生産者であるがゆえ

に資本家ではない、そういう人々が構成する「(近代的ゲゼルシャフト)、それが平田市民社会だ。

ただし、以上は公刊当時の論争場裡の一角に聳えた名著『経済学と歴史認識』の大きな影響力を背景とした判断である。次なる労作『コンメンタール「資本」』(1980年)で氏は、茶とコーヒーに、その非・市民的出自を厳しく問うことないまま、第二形態(及び以後)に登場を許していた。約10年の歳月を経たのち、かの名著の姿勢に変更を加えたのはいかなる転轍を経てあったろうか、残念というしかない。一注目点としては、金が姿を消し、代わりに銀が採用されたが、「採掘労働時間」問題の本質は少しも変わらない。百度も躊躇したが、この付言を避けるわけにはゆかないだろう。

*

どのプランでも、『資本論』の考察範囲は「資本一般」である。「外国貿易」は、プランのずっと後の方に位置する。つまり、価値形態論の舞台は、おおむねはブリテン島を中心に「だいたい一国的・純粋資本主義」なのだろう。「だいたい」というのは、貨幣商品の出入りは防げないのと、空間的には一国のすみからすみまでカバーしなくともよい、という意味だ。「一国」の中には小農も手工業者もいる。ほかに、理論の舞台であるイギリスには独特の不労所得階級「地主」(日本的ちまちま地主とはケタが違う)もいるが、無視していいだろう。

この「だいたい一国」で、「民衆のあいだに、人間は平等だという考えが常識としてしっかり根付いてきたとき」(国民文庫114ページ改訳)、そこが価値形態論の世界になるはずだ。この時空間でこそ、同質人の交通・生産・労働がほんらいの生命力を発揮する。海の遙かかなた、プランテーション経営主に非道に搾取され血の涙を流している人々の労働も「人間的労働」に含めたら、「抽象的な・人間的な・労働」という価値論の大前提は煙のように消え失せる。

「人間の本質は、…社会的諸関係のアンサンブル(総和)である」というフォイエルバッハ・第六テーゼまで遡る必要はない。「抽象的・人間的・労働」をそこから抽出する母集団には、奴隷や半農奴的小作農も、彼らの労働も含まれてはいけないのである。

ああそれなのに価値形態論のマルクスは、

- (1) のっけから自らの労働だけで生産し・所有するかのような人物を登場させるが、実は他の生産者から原素材を貨幣で買っている背景には触れようとしない。
- (2) 第一形態では、幅のないリンネルと上着を等置させ、
- (3) 第二形態からは、一・私的・労働者が単身で作れるはずもない「半トンもの鉄」を持ち出したばかりか、
- (4) アジア原産の紅茶と南米原産のコーヒーを無造作に混入して、価値の背後にある「抽象的・人間・労働」の範囲を地球大的にぼやかし、

- (5) しかも、第二・第三形態では、のんきに金を登場させておきながら、後になって実は「金の価値は原産地での産金労働時間で決まる」のだと聞かされるものだから、第四形態(貨幣形態) までまじめに読んできた読者をがっかりさせる。

結、もっとファンクショナルなマル経を

ふたたび、あの教室に戻ろう。だんだん退場して残り少なくなった学生が質問する。

「先生、20ヤールのリンネルの幅って何センチですか?」:「いろいろあるさ」

「先生、上着テーラーは布・糸・ボタンをほかで買うんですよね」:「当たり前だ」

「先生、リンネル所有者が鉄を半トンも欲しいとは思えませんが」:「例えだよ」

「先生、金もリンネルで自分の価値を計るんですか」:「金持ちの気まぐれかも」

「先生、コーヒー畑で働く奴隷の労働も人間的労働ですか」:「奴隷も人間だろ」

「先生、金掘りの労働時間ってどうやって計るんですか」:「時計に決まってる」

*

宇野氏は、「マルクスはエライものを発見した。ノーベル賞ものだ。」と価値形態論を絶賛していたけれど、審査委員会ではまず「1着の上着って何ですかね」と疑問続出、30分ほどで却下だ。座談のひと齣とはいえ、このジョークはいただけない。

こうした入り口での解答なし難問にもかかわらず、私にとって、『資本論』を当然含む多くの労作は、人間の生き方・社会の在り方・成り立ち方を世界史的視点から考えさせてくれる、依然として代替不可の汲めども尽きぬ知の泉であり続ける。

それとは違う動機で、「なぜ自分はこんな長時間労働に耐えているのに不正規雇用のまま低賃金なのだろう」と苦しみ悩む人々が、解答を求めてすがるように扉を叩いて間もなく、冒頭、価値形態論の藪に迷い込み、第二形態あたりでもうギブアップ、息も絶え絶えでマルクスとはこれでおさらば、やっぱりマイクロだ、マクロだという人々が少なくないだろう、と想像するのはかなしい。

この小文は、アングル次第では価値形態論とはこれほどにも面妖なものに見える、ということを示せばそれでいい。「リンネルと上着」という文字に、な一人にも疑いを持たない人は、しあわせである。

*

価値形態論の少しあと、第三章に「社会の胃袋」という、なみの解説書は知らん顔でスルーする言葉がポツンと出てくる。要するに、社会の需要には限りがあるから、平均的な生産費(業界常識の利潤を含む)以上で作られた商品、つまりはそれ以内で作られた諸商品より高価にな

る商品は売れない。そういう生産者はいずれ市場から撤退するから、結果として、需要にちょうど見合うだけの生産が行われる、というのが、そこへもし、この安定した胃袋をあてにして、平均的コスト生産者（複数）が新参入してきたらどうなるのか？ このまだ素朴な競争論とも言うべき論理に潜むあやうい問題に気付いたのか、マルクスは一度だけで「胃袋論」の口を閉ざす。だが、はて、この論理は、あの、「需要曲線と供給曲線の交わるところで……」という論理と五十歩百歩ではないのか？

あれやこれや、いろんな迷いの果てに望むのは、次の若い世代にマルクスを手にとって貰うための、思い切ってファンクショナルな、言い換えれば、『資本論』の章立てからフリーなマル経テキストを読みたい、ということだ。小文の趣旨からもう付度していただけるだろう。それは、誰にもわかりやすい「価格論ベース」ですすむストーリーだ。

大書店の棚には、今も「新しいマルクス経済学」を自負する労作も少数だが並ぶ。だが、それらの幾つかは、現代の主流に侮られたくない、という意識からだろう、労働価値説の数学的論証に熱中していたりしている。そうした「研究」への敬意を表するのにやぶさかではないが、小文の願いは別次元にある。

「2016年時点ですでに、世界の富裕層トップ1パーセントの富が、残り99パーセントのそれを上回るという超格差社会」（英NGO「オックスファム」の計算）という世界の超末端で、不規則雇用、長時間労働、低賃金に苦しむひとびとに、「低賃金や失業は貧乏人の自己責任だ、理論の問題じゃないよ」というのが現代の主流派（新古典派経済学または新自由主義万歳経済学）だとすれば、それとは全く別に、こうした暗黒面を真正面から見つめる、まったく別の経済学もあるのだ、ということを知ってもらいたい、ということだ。

単なる公憤や同情からだけの告発にとどまらない筋道を明らかにできるのは、「現実に眼を据え、理路がすっきり通る、新しいマル経」しか今はないだろう。これだけは譲れない「働く者は人間の尊厳をもって生きる権利がある」という命題を明らかにするテキストの出現をひそかに待望しているのは、果たして私だけだろうか（完）。

【 あ と が き 】

一市井人となって久しい。学界の動向はネットで検索するしかないが、飽きるほどの作業は報われなかった。大書店には今も並ぶマル哲・マル経の本をチェックし、「これは」と思う新刊のページから察する以外にない。そうした中から刺激を受けたのが、ジェラルド・デュメニル＋ドミニク・レヴィ氏の共著『マルクス経済学と現代資本主義』（2006年初版、こぶし書房）と、川上則道氏の『マルクスに立ちマイクロ経済学を知る』（2013年初版、新日本出版社）だっ

た。前者は「価値論は現代経済の分析には何の役にも立たない」と明言して憚らない。後者はのっけから価値形態ならぬ生産価格から論を起す。書きためただけの戯文が、まるきり見当違いではないとの、ほのかな自信を得たのは、この二書のおかげである。相田慎一・吉田雅明両氏による「新しいマルクス経済学の教科書プラン」(『専修大学社会科学研究所年報第54号、2017年)の冒頭で、両氏が「マルクス経済学において、経済社会を捉える際の基礎理論は再生産論である」と規定した上で、そこへと至る「前段があまりに長すぎる」、「価値形態論から再生産表式に至るまで」の膨大な議論が…再生産モデルに適切にリンクされない」と指摘されたことも、問題意識は異なるとはいえ、本稿の公表をうながす、一つの貴重な後押しになった。

「社会的共通資本」という新しい分析視角から、マネー資本主義の暴走を鋭く批判した宇沢弘文氏も、「経済学の復権は絶望的です」と嘆息しておられた(『対談・新しい経済学は可能か③』、『世界』2009年6月号)。労働者の雇用を気遣ったケインズを嘲笑し、アマーティア・センから「合理的な愚か者」と一喝されても馬耳東風の新自由主義に今さら反省を求めるのは無理のようである。そうした背景のもとで、わが国独特の長い学的伝統に縛られない「マルクスの読み直し」のための小さな一提言として受け止めてくだされば幸甚この上もない。

原稿に改めて手を入れつつ、数十年前にある所で吐露した苦渋を思い出した。「高島善哉氏のご指摘によれば『市民社会を固有に分析する資本論第一巻第三章』までにさえ、わたくしの眼はとどいていない」(『マルクス歴史理論の研究』1973年、岩波書店)と。その「届かなかった」わけを、紙幅に恵まれた今、自虐同然に吐露することで、ようやく肩の重荷をおろす。が、しのぶることの弱りもぞする。公表にためらう肩を静かに押して下さった上、公刊までの俗務を担って下さった村上俊介教授、紙幅を割いていただいた専修大学社会科学研究所に深く感謝する。改めて長谷部訳『資本論第一巻』(昭和21年刊)をいとおしみながら。